

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT

2009 VOL.8

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

楽 学生生活
Campus life

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

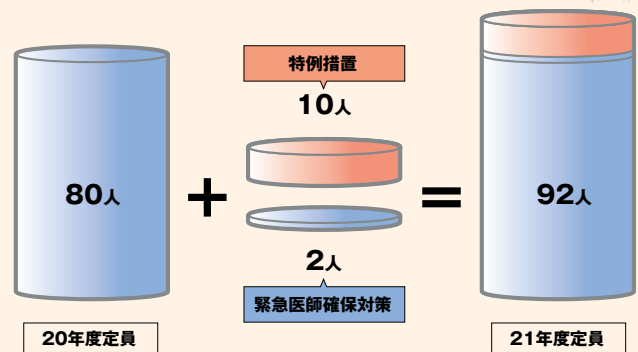
和 お知らせ
Information

21年度入学生より定員を増員します

来年度(平成21年度)入学生より、定員を12人増員し現在の80人から92人にします。

これは、文部科学省等による医師不足の深刻化に対応するための「緊急医師確保対策」及び「経済財政改革の基本方針2008」を受けた特例措置に基づくものです。

なお、「経済財政改革の基本方針2008」を受けた特例措置については、8月に文部科学省に申請し昨年12月に増員が認められました。



◎今回の増員についての本学の状況

区分	緊急医師確保対策	「経済財政改革の基本方針2008」を受けた特例措置
趣旨	国がとりまとめた「緊急医師確保対策」に基づくもので、入学者全員に対し愛知県が設定する修学資金貸付制度が用意されています。また、この修学資金は、卒業後に愛知県が指定する公的な医療機関において、9年間以上の勤務(臨床研修を含む。)を条件とするもので、地域医療に積極的に貢献することが期待されています。	「これまでの閣議決定に代わる新しい医師養成の在り方を確立し、早急に過去最大程度まで増員する。」とした「経済財政改革の基本方針2008」を踏まえた措置です。増員を希望する各大学には、医師不足が深刻な地域や診療科の医師を確保するための実効ある取り組みが求められています。
増員数	2人	10人
選抜方法	推薦入試	一般入試

“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

連携病院

連携病院—地域医療を担う拠点・中核病院

愛知県厚生連 海南病院—Q:病院の特色は?

海南病院は1938年「地域医療を守る」を理念に開設され昨年開設70周年を迎えました。現在愛知県西部、三重県北勢地区、岐阜県の南部地区の一部を診療圏として急性期医療に基軸を置き、医療・保健・福祉と包括的総合医療機関として機能しており、周産期母子センターから急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、緩和ケア病棟、海南ERを有し、地域完結型の基幹病院としての役割を果たしています。CSRを意識し、社会貢献をするべく地域の安全・安心の最後の砦を信念としています。また「職員の和」を重視する海南精神のもと全職員がたいへん協動的で、働きやすい環境が醸成され、チーム医療をもとに、ここ数年、人材育成の教育病院としても力を入れています。今後とも、アカデミアである名古屋市立大学との連携をお願いし、瑞医の読者の皆様方にはご指導、ご支援をお願い申し上げます。



愛知県厚生連 海南病院 院長 山本 直人

NTT西日本東海病院—Q:病院の特色は?



「名古屋市立大学病院との病病連携を目指して」

1971年、電電公社の職域病院として設立され、その後電電公社の変遷と共に、1982年一般開放され、1996年に現在のNTT西日本東海病院となっています。当院は名古屋市の中心、中区に位置し病床数150床と中規模病院です。開設以来、各科の医師は歯科を除き全科が名古屋市立大学病院の関連医師で構成され、当院の特色として各科で特化する医療を目指しています。中でも、県下で1、2を争う脊椎手術数を誇る脊椎疾患を中心にした、脊髄・脊椎センタ、NTT社員及び家族を中心にした年間約7000例の人間ドックをこなす総合健診センタ、消化器疾患の診断治療の充実を目指した内視鏡センタなどで実績を伸ばしています。今後、当院の役割の1つとして、名古屋市立大学病院に最も近距離にある連携病院であることより、名古屋市立大学病院との病病連携を強化し、当院に適した患者さんを積極的に受け入れていく所存ですので宜しくご支援のほどお願い致します。

NTT西日本東海病院 院長 塚田 勝比古

教育

M2医学英語—6年一貫教育

医学部では昨年から医学英語を6年一貫教育の柱の一つとすることになりました。このカリキュラムでは、原著論文から必要な情報を得られること、英語でプレゼンテーションができること、英語で基本的な診療ができることを目標に徐々にレベルアップを進めています。その一環として、2年生を対象に今回初めて英語による医療面接実習を行いました。まず人文社会学部のnativeの英語教員5人の協力を得、既往歴や社会状況を含むシナリオにより模擬患者の役作りをお願いしました。学生はモデル学習とロールプレイで医療面接の基本ステップを学んだ後、当日はグループに分かれ、一人一人が病状の異なる模擬患者を相手に英語で医療面接を行いました。学生は教員の迫真の演技にコチコチになっていましたが、個々の面接後に教員とふりかえりの討論を行う内に意義深い議論ができました。特に印象的だったことが2つあります。1つは、日本語であれ英語であれ、患者さんが医師に求めるのは悠長な会話力ではなく、あらゆる手段を使って患者さんの話を理解しようとする態度だということです。言われてみれば自明なことですが、医療面接に限らず多くのことに通じる話でした。もう一つは、意味が分かっていても分からなくても、医療では患者さんの言葉の意味を確かめる必要があるということです。日本語でも胸痛や腹痛などの言葉が身体のどの場所のどんな事象を指すのかは患者さん毎に様々です。今回のカリキュラムは、医学英語だけでなく医療におけるコミュニケーションと日常会話との違いを印象的に学ぶ機会となりました。



(文責:医学・医療教育学 早野 順一郎)

研究者紹介



Meicho Nakayama

中山 明峰(なかやまめいほう) 耳鼻咽喉・頭頸部外科学 病院准教授

専門:平衡学・睡眠医学(テーマ:睡眠が平衡に与える影響)

これまで愛知医科大学耳鼻科で平衡学を約20年、睡眠時無呼吸症候群を約10年、専門として診療と研究に努めて参りました。平衡専門医は全国で100余名、睡眠認定医を持つ耳鼻科医も100余名。私は一見関連のない両方を専門とする変り者であります。2008年から名古屋市立大学に勤務させて頂くようになってから、この二つの仕事を合わせた新たな着眼点から、「めまい患者の睡眠状態」のプロジェクトで、現状のめまい診療に新たな風穴を開けたいと思っています。その第一報は2008年度日本めまい平衡医学会総会で臨床研究賞を頂きました。この受賞は、私を採用し、研究を勧めて下さった村上信五教授、そして名古屋市立大学のお陰であり、感謝です。

近年の論文:Otolaryngol Head Neck Surg. 138:619-625 (2008)



Ichiro Tatsuno

立野 一郎(たつの いちろう) 細菌学 講師

専門:細菌学(テーマ:A群連鎖球菌による劇症型感染症に関する研究)

A群連鎖球菌は、古くから咽頭炎、猩紅熱などの原因菌として知られていましたが、近年劇症型感染症の起原菌となる例が報告されるようになってきました。この病気は、全身の様々な組織に重篤な病態を引き起こしますが、中でも筋肉が急に腫れ数時間から数日のうちにどんどん壊死していく壊死性筋膜炎は典型的な症状です。発症の分子機構は殆どわかっていませんが、本菌によって菌体外に放出されるいくつかのタンパク質が関与していると考えられています。現在は、分泌タンパク質の一つであるNga (NADase) に注目し、劇症型感染症マウスモデルを用いて発症との因果関係についての解析を行っています。

近年の論文:Microbiology 153: 4253-60 (2007), Infect Immun. 74: 265-72 (2006)



Maki Tsujita

辻田 麻紀(つじた まき) 生物化学 講師

専門:生化学(テーマ:低HDL血症発症の分子機構の解明)

低HDL血症は冠動脈疾患や脳血管疾患の危険率を増加させることが以前より知られています。近年様々な細胞内の分子機構が解明され、体内でのHDL新生は主に肝・小腸から分泌されるアポAI蛋白質と細胞表面に存在するABCトランスポーターの一種であるABCA1の関与する機構が認められるようになりました。我々は肝実質細胞がHDL産生の主要な臓器であることを明らかにし、これを出発点として肝のHDL産生低下を誘引する状況を探索しています。現在は複数の疾患の重複によるリスクの急激な悪化を議論する時代となり、アテローム性動脈硬化と他の疾患との関連、特に高血糖のもたらす肝由来HDL産生への影響について検討しています。

近年の論文:J Cardio Pharm, 51 (3):258-266 (2008), J Lipid Res. 49, 386-93 (2008)
J Lipid Res. 46 (1):154-6. (2005)



Takeshi Ebara

榎原 毅(えばら たけし) 労働生活・環境保健学 助教

専門:産業保健・人間工学(テーマ:職域における腰痛・頸肩腕障害などの作業関連運動器疾患予防)

働く人々の健康を守るために、主に腰痛などの運動器疾患に関するリスク軽減策について、フィールドを重視した応用研究に取り組んでいます。昨今の経済情勢の悪化に伴い、特に中小企業における安全衛生水準の低下が懸念されています。研究成果を社会へ還元することはもちろん、予防・社会医学領域の一員として現場主義を忘れずに、教育・社会貢献の観点からも世の中の問題解決に積極的に貢献していきたいと考えています。

近年の論文:Ind Health 46 (5):497-505 (2008), Appl Ergon 39 (6):697-709 (2008), J of Human Ergol. 36 (1):13-23 (2007), Ind Health 45 (5):552-563 (2007), Ind Health 45 (2):256-267 (2007)

公的委員ほか:ISO/TC159(人間工学)国内対策委員会SC3分科会委員、日本人間工学会広報委員会委員、日本人間工学会人材育成プログラム開発委員会委員、日本産業衛生学会東海地方会ニュース編集委員会編集委員、産業保健人間工学会認定作業管理士試験「講習会・テキスト検討委員会」委員ほか。

新任教授のご紹介

臨床病態病理学 — 稲垣 宏教授

Q:今後の抱負をお願いします。

平成20年12月1日付で准教授より昇任し、臨床病態病理学分野および名古屋市立大学病院病理部長(兼任)を担当させていただくことになりました。

平成20年は日本の病理学においてふたつの大きな変化がありました。ひとつは“病理診断科”が診療標榜科名と認められ、他の診療科とともに院外広告が可能となったことです。もうひとつは診療報酬における第13部“病理診断”が創設され、“病理診断”は病理専門医による医行為であることが明確に示されたことです。このように病理学を取り巻く環境は大きく変化しています。基礎医学としての病理学を踏まえつつ、臨床医学としての病理診断学の発展のために、教育・研究・診療を通じて、精一杯努力していきたいと考えています。今後ともご指導ご厚誼を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



稲垣 宏 教授

病態モデル医学分野&実験動物研究教育センター — 三好 一郎教授

Q:今後の抱負をお願いします。

平成20年12月1日付で新たに設置された病態モデル医学分野の担当、および実験動物研究教育センター長を拝命することになりました。現在、細胞表面糖鎖の機能解明を目的として遺伝子組換え動物を作製・解析していますが、本分野では、研究および診断・治療法の開発に有用なモデル動物の作出、さらにそのモデルを用いて疾患の原因・発症機構の解明を推進致します。一方、実験動物研究教育センター長として研究教育に相応しい動物実験環境を提供するために、高度技術支援や適正な飼育管理、設備機器の維持・更新、社会への対応および情報公開など、広い視野でセンターの運営を目指します。既に、新分野の体制作り、およびセンターの経営基盤や経理法の見直し、法改正に伴う動物実験規程の策定・実施などの緊急課題もあります。今後とも御指導御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



三好 一郎 教授

実験動物研究教育センター 業務士 西尾 政幸さん

平成20年度医学教育等関係業務功労者表彰(文部科学大臣表彰)を受賞!

Q.この賞は長年の医学教育への功労が顕著な方に贈られるものですが、普段の仕事について教えてください。

A.機器等のトラブルへの対応、研究者への連絡、講習会・会議等の準備、会計・消耗品の管理、等々が主な業務です。

Q.お仕事をされる上で、最も大事にされていることは?

A.“健康”です。人も動物も(機器も)、病気(故障)のない、安全で安心して利用していただけるセンターを!!

Q.最後にあらためて受賞の感想を!

A.32年間実験動物に関わってきて、今回このような素晴らしい賞を頂き身にあまる光栄と思っています。この賞を頂けたのも三好先生と、まわりの皆様方のお陰と思い感謝しています。今後は、名市大で初めての動物に挑戦していくところです。



OB訪問



岸川 輝彰氏

(藤田保健衛生大学常務理事)

昭和53年9月、名古屋市立大学第2外科から名古屋保健衛生大学(現・藤田保健衛生大学)へ小児外科の助(准)教授として赴任して以来30年余りが経過し、その後の教授昇任と大学病院長の拝命。そして常務理事・学務学監を仰せつかったのを機に白衣を脱ぎ、現在に至っております。学監制度を廃止した今日、肩書は常務理事のみとなりましたが、責任業務は以前と変わりません。医療収入の激減に加え、研修医をはじめとする慢性の医師不足とそれに伴う医師の過重労働、後を絶たない医療紛争など、地域医療の崩壊に対して、医療系専門職総合育成機関としての本学の責務を両肩にひしひしと感じながらも、名古屋市立大学の卒業生としての自負を忘れず、本学に課せられた社会的使命ともいふべき、良き医療人の育成に向けて、日夜、奮闘しております。

昭和40年名市大卒業、昭和41年第二外科入局、昭和45年名古屋市立大学大学院修了、昭和49年よりオーストラリアシドニー市の小児病院へ留学、昭和53年名古屋保健衛生大学(現・藤田保健衛生大学)医学部小児外科助教授、昭和63年教授、平成14年藤田保健衛生大学病院病院長、平成15年より現職

学部学生生活

MD-PhDコースが、設立されました

本学では医学部学生時代から研究に従事し、若い時期に研究の芽を開花させ、将来の大学での医学研究を支えていく人材を育成するために、新しいMD-PhDコースを設立いたしました。

このMD-PhDコースの特徴は医学部学生の前期と、博士課程大学院生の後期に分かれます。前期では、医学部1年次から3年次終了までにコースに入り、その後基礎医学分野の教室で研究に従事します。6年次にそれまでの研究成果を欧文専門学術雑誌に公表し、審査会で前期終了の審査を受けます。

医学部卒業後、名古屋市立大学病院臨床研修プログラムで初期研修を行いつつ、臨床研修の2年目から後期の博士課程へ入学します。後期の博士課程では引き続き基礎医学分野の教室で研究を続け、3年次に研究成果を学位論文にまとめ審査を受け、博士課程を早期修了し学位を取得します。

本年度から始まりましたMD-PhDコースでは、現在7名の医学部学生が所属しております。MD-PhDコースの学生は、川久保巳代子様のご寄付により設立されました川久保学生奨学金により全面的にご支援をいただいております。なお、川久保学生奨学金に関する詳細は本誌の7ページに掲載しております。

クラブ活動紹介

第3回 卓球部

今年度西医体
優勝!



西医体会場で一胸元のメダルが光ります!

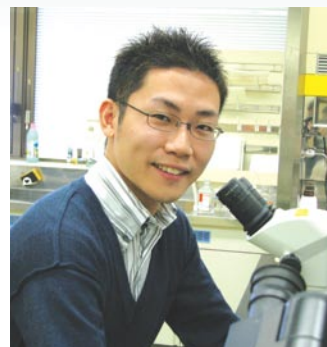
卓球部は創部50年になり、現在部員は50人です。医学部は薬学部、看護学部と一緒に練習しています。2008年は西日本医科学学生総合体育大会 男子団体戦で優勝を果たせました。男子団体戦での優勝は創部初で、部活の団体戦での優勝は名市大としても十数年ぶりとなっています。参加する大会はその西医体を始め、春と秋に近畿大会、冬は西医歯薬などがあり、他大学との交流も豊富です。部活は火・木の二回、山の畑キャンパス体育館の卓球場で行っていて、自主練習もできます。部員の半分以上は初心者始めで、卓球をやったことが無い人もすぐうまくなるので非常にやりがいがあります。卓球は幅広く受け入れられるスポーツだと思うので、興味がある方はぜひ卓球場へ足を運んで下さい。

卓球部 西医体出場時主将 M4 川村 正隆

大学院生の紹介

澤田 雅人 (さわだ まさと) さん大学院医学研究科博士課程1年生 (再生医学分野) に大学院生活についてお聞きしました

現在本研究科博士課程では、診療と研究を掛け持ちする臨床系大学院生が多いが、修士課程やMD-PhDコースの設置により今後は基礎教室に所属する者も増加すると期待される。そこで、基礎系大学院生として嗅球ニューロン新生の研究に取り組む澤田雅人君に話を聞いた。「私は日夜研究テーマと向き合っており、実験を重ねて説得力のある結果を示すことを心掛けています。」と澤田君は話している。実際に彼は、昨年7月の第6回木曾生物学セミナーで研究成果を口頭発表し、活発な議論を研究に活かしている。「自らの手で疑問を解決していく研究のプロセスは非常に充実しています。『偶然は準備する者を助ける』の精神で研究を進め、世界的な成果を発表したい!」と語る澤田君の活躍に期待したい。



澤田 雅人:2006年慶應義塾大学理工学部卒業、2008年同大学院理工学研究科修士課程修了
現在、本学大学院医学研究科博士課程1年在学中(再生医学分野)

精子をめぐる冒険 (男性不妊症治療最前線)

ART (生殖補助医療技術) が降臨した1980年代半ば。名古屋の産婦人科の草分けの重鎮は、当時の研究会で不妊症治療における男性の役割を“ (単なる) 四畳半的存在である。”と意味深に位置づけた。やがて時は流れ、男性因子の原因解明が進むと、難治性不妊症の克服には泌尿器科の存在が不可欠となった。彼らの神の手がもたらす福音は、“不妊症イコール女性側に原因”という構図を塗り替え、多くの女性を呪縛や偏見から解き放った。その時、男は試された。それまでの勇氣ある女性のように、自分に原因があるということを受け入れられるだろうか。子供を持つという事を深く理解し、真摯に治療に立ち向かうことができるだろうか。

今回は“男もつらいよ (泌尿器科編)” に佐々木先生と同行してみた。(取材:尾崎 康彦)

Q:男性不妊症の現状とは?

カップルの15%が不妊であると言われていますが、半分近くで男性側にもその原因があります。最近ARTの発達で、少しでも正常精子があれば子供に恵まれるチャンスはありますが、精液中に精子が全くない状態 (無精子症) は治療に苦慮します。しかし近年、精巣や精巣上体から精子を採取し、体外で顕微授精を行い、受精卵を子宮へ移植することによって挙児を得ることができるようになってきています。

Q:名古屋市大の泌尿器科における男性不妊症治療の特徴は?

名古屋市大泌尿器科においては、国内でも早い時期から顕微鏡下に精巣内から精子を採取する手術 (MD-TESE) を行っています。通常の精巣生検では精子を全く認めないようなケースでも、約50%で精子が得られます。採取された精子は、産婦人科の先生によって卵へ顕微授精されます。この方法によって以前は絶対不妊といわれていた不妊カップルの患者さん (クラインフェルター症候群なども含む) でも子供さんに恵まれるようになりました。神の領域に医療が踏み込んでいる最前線と自負しています。



(写真左から、泌尿器科 佐々木昌一講師、梅本幸裕講師、岩月正一郎医師)

Q:今後のビジョンは?

MD-TESEによっても、まだ半数の非閉塞性無精子症患者さんでは精子が採取できません。これは精子形成のメカニズムについてほとんど解明されていないからです。ARTの進歩はあくまで技術の進歩であって、無精子症を治療しているわけではありません。わたしたちは、不妊カップルのために造精機能を解明することを使命と考えて、毎日の臨床や研究を行っています。

最先端の機器と技術の提供 (内視鏡診断・治療の最前線)

近年の消化器内視鏡診断における進歩はめざましい。内視鏡自体の進歩としては患者への負担を軽減するために開発された経鼻内視鏡とカプセル内視鏡、今までは到達できなかった小腸の観察を可能にしたダブルバルーン内視鏡の登場である。また光学系技術の発達においては病変を拡大して観察することにより微細な粘膜の変化をみることを可能にした拡大内視鏡や、特殊光を用いたNBI、AFIの登場である。最先端の機器の取り扱いに精通することが大切で、専門の知識を持った内視鏡技師や高度の技術を持った若手内視鏡医の育成が重要である。

名古屋市大の内視鏡部では、消化器内科外科のみでなく、呼吸器内科外科、整形外科の医師の協力のもと診療を行っている。



(写真:前列左より小笠原医師、松実主任看護師、中沢副部長、佐々木医師、後列左より権田看護師、武田看護師、新里看護師、和田医師、久保田医師)

消化管領域 カプセル内視鏡やダブルバルーン内視鏡による小腸疾患の診断や治療。拡大内視鏡とNBIを用いた癌の浸潤範囲、深達度の正確な診断に基づき、粘膜下層剥離術を施行し、従来は外科的手術の適応であった疾患を内視鏡的に切除している。

肝臓領域 他院で治療が不可能な食道静脈瘤に対する硬化療法が行われているばかりでなく、全国に先駆けてラジオ波による肝臓癌の治療を多数例施行してきた。**胆膵領域**:超音波内視鏡、管腔内超音波検査、経乳頭の胆管生検、超音波内視鏡下膵生検による診断と胆道膵臓疾患におけるドレナージ術を中心に、さらに最近では悪性十二指腸狭窄に対して、海外から輸入しているthrough the scopeのステントによる挿入術が評価され、多数の施設からの紹介を受け入れている。

呼吸器 気管支超音波内視鏡下の生検や特殊光内視鏡観察 (AFI) を用いて早期癌の発見に力を入れている。最近では胸腔鏡を用いて原因不明の胸水や胸膜炎の診断を始めた。

整形外科 手術室を1部屋有しているのが特徴で、整形外科の医師による関節鏡による日帰り手術を行っている。日帰り手術を施行している施設はなく、全国から患者さんが来院している。
(担当:中沢貴宏内視鏡部副部長)

世界にはばたく光線療法 (皮膚科治療の最前線)

治りにくい皮膚の病気として、乾癬、白斑、アトピー性皮膚炎があげられるが、外用薬だけでは治療が難しい場合があり、現在の生物学的製剤などの創薬の大きなターゲットです。いずれの疾患にも太陽の紫外線が有効であることが知られ、以前から太陽と近似する様なUVB (中波長紫外線) やPUVA (ソラレン+UVA) などが用いられていました。しかし、オゾン層の破壊とともに紫外線による皮膚癌の発症が問題となり、安全性が高く効果の良い紫外線療法が望まれています。私たちの診療科・研究室では、紫外線の波長ごとの光生物学的な特性を追い、選択的な波長を用いることで、いずれの難治性皮膚疾患に優れた治療効果を上げるだけでなく、本邦における紫外線照射機器の開発を行ってきました。現在までに、写真に示すセラビーム308 (308nmエキシマライト) 以外に、ナローバンドUVBの2機種を開発を行いました。開発の結果、ナローバンドUVBは一般診療で約900台が使用されています。なお、セラビーム308は名古屋市立大学での機関所属発明実用化第1号となり、平成20年11月第1回名古屋市立大学産学官連携活動表彰を受賞致しました (本誌06頁参照)。「医工学連携でさらなる光線治療器の開発を行いたい」思いは熱く、皮膚疾患だけでなく、消化管、膀胱・前立腺、眼などの他の臓器の疾患に対しても新たな光線治療機器、さらには光増感薬の開発を進める予定です (光学医療センター)。名古屋市立大学が名古屋という便利な土地に立地し、周囲の工学部、メーカーと連携をとることを生かし、医療工学のメッカとし、世界にはばたく光線療法を提供したいと思っています。

(担当 皮膚科部長・教授 森田 明理)



地域貢献・地域活動

名工大・名市大合同テクノフェア2008が開催されました！



平成20年11月5日、名古屋市中企業振興会館（吹上ホール）において、大学にある技術の種（シーズ）を外部に公開するテクノフェアが名工大・名市大の合同で開催された。本テクノフェアはこれまで名工大が単独で開催してきたが、平成19年に両大学間で締結された「相互の連携・協力の推進に関する協定」を受けて、今回はじめて名市大が参加して行われたものである。今回のメインテーマは「産学官が創造する未来」であり、両大学の連携に基づく産学官連携の推進を目標として、講演、シーズ発表会、パネル展示などが行われ、学外より345人、名市大関係者140人、名工大関係者271人の合計756人が参加した。「あらたな光線治療機器の開発～医療機器研究開発の成功の秘訣」と題する記念講演を行った森田明理教授（加齢・環境皮膚科学分野）の発明は、本学医学研究科の特許が製品化された最初の例である。今回医学研究科から計9件の研究シーズが出展され参加者の関心を集めていた。工学系研究者や企業の参加は医療・医学の発展に欠かせないものであり、今後この合同テクノフェアが両大学による医工連携の機会を模索する場として活用されることが期待されている。（文責：再生医学 澤本 和延）

学生代表委員会が発足しました！

みなさんこんにちは。このたび、医学部学生代表委員会の会長を拝命いたしました早川俊輔です。みなさんにとって、この医学部学生代表委員会という組織は聞きなれないものだと思います。そこで、この場を借りてご説明させていただきます。元来、医学部自治会という組織が存在していたのですが、長い間活動を休止していました。そのため、大学の教職員の方々と学生の窓口となる機関が存在せず、学生と教職員での相談や、学生ならではの考えを表明することができませんでした。そこで、学生と大学教職員の方々とのパイプ役になる組織が必要であると考え、今回、名称も一新し、各学年2名ずつの委員から成る医学部代表委員会が成立する運びとなりました。まだまだ成立して間もない組織であり、経験もありませんが、より充実した大学生生活の実現を目指して委員一同活動していきたいと思っておりますのでご協力をよろしくお願いいたします。（学生代表委員会 会長 M5 早川 俊輔）

以下のメンバーで頑張ります！

執行部	会長	M5	早川 俊輔
	副会長	M4	西 大輔
	会計	M3	森 亮介
	書記	M5	金森 貴之
	広報	M3	塩崎 美波
各学年代表委員	6年生	浅井 千尋	吉田 悟
	5年生	金森 貴之	早川 俊輔
	4年生	西 大輔	野口 翔平
	3年生	塩崎 美波	森 亮介
	2年生	佐野 未来	米津 大貴
1年生	加藤 潤貴	丸茂 義晃	

桜山の懐かしのお店紹介 —第3回「石焼&ワイン イワタ」さん

桜山に生きる者で、「石焼きとワイン」の看板を知らない者はいないだろう。医学部の大先輩に連れられて入ったイワタの店内には、居心地の良い空間が広がっていた。常々「石焼き」とは何だろう、と思っていたが、目の前に現れた石を見て、その疑問は水解した。熱く焼いた石の余熱で肉を焼くのだ。焼くうちに脂がほどよく落ち、しかし口に運ぶとやわらかくジューシーで、何だか幸せな気持ちになった。肉が舌の上でとろけるという感覚を、23年生きてきて初めて知った瞬間だった。何か特別嬉しいことがあった日は、ぜひこの店でこの味と共に祝いたい。落ち着いた店内で舌鼓を打ちながら、僕はそんなことを考えた。

（紹介：M4学生）



これが舌の上でとろけるお肉だそうです…。うらやましい～



桜山交差点西北角。



MAP

大学院生・学部学生への奨学金を創設しました。

修士課程学生対象「明石基金」の創設について

この度、名古屋市立大学医学部名誉教授、故明石修三先生からのご寄付を基金として「明石修三学生奨学金」制度が創設されました。明石修三先生は本学医学部生化学講座教授として多くの優秀な人材を育成し、退職後も本学の発展を心から期待し、それに役立てるべく私財を積み立てられておられました。先生は平成17年6月17日ご逝去されましたが、本学医学部における基礎研究の発展のため積立金をご寄付なされました。明石修三学生奨学金は、先生の御遺志を受け継ぎ、名古屋市立大学大学院医学研究科修士課程から博士課程への進学を支援し、若手研究者の育成を奨励することを趣旨とするものです。本奨学金は、この趣旨に基づいて、修士課程修了後に世界をリードする学術研究者となるべく、高い意欲と向上心を持って博士課程進学を目指す学生に授与されます。

本奨学金の概要は以下の通りです。

- ・本奨学金は、毎年度、名古屋市立大学大学院医学研究科修士課程から同博士課程へ進学する学生2名に授与されます。
 - ・本奨学金の選考は、修士課程委員会があたり、教授会の承認を得て決定されます。
 - ・奨学金は、一名につき博士課程入学金および授業料1年分が授与されます。
- 本奨学金制度は平成22年度、第一期の修士課程修了者をもって開始されます。



故 明石 修三名誉教授

学部学生対象「川久保基金」の創設について

この度、川久保己代子様より「医学研究者の人材育成に役立てていただきたい」との趣旨でご寄付をいただき、川久保学生奨学金が創設されました。

本誌の4ページの学生生活で紹介しておりますMD-PhDコースの学生を含めた以下の学生を対象に本奨学金による支援を行うことになりました。その概略は原則として以下の通りです。

- ・MD-PhDコース博士課程の大学院生の各学年から2名を対象に入学金と授業料の同額の奨学金を授与します。
- ・MD-PhDコース医学部学生の5名を対象に1名につき10万円を授与します。
- ・基礎医学系分野所属の大学院学生の各学年から1名を対象に、授業料と同額の奨学金を授与します。
- ・看護学部学生もしくは看護学研究科大学院生から5名を対象に1名につき10万円を授与します。

特に、MD-PhDコース博士課程の大学院生は入学金と授業料に相当する額の奨学金を授与されますので、研究を志す本学卒業生にとっては、大変恵まれた支援となります。将来、医学研究を担う人材が川久保学生奨学金の中から一人でも多く育つことを期待しております。

現在、本奨学金の支給対象となる奨学生を順次選出し、最初の贈呈式はMD-PhDコース医学部学生を対象に2月6日に行いました。(上写真) この紙面をお借りして川久保己代子様に改めて心より感謝申し上げます。



川久保己代子様(写真中央)と第一期奨学生6名。2月6日に行われた贈呈式にて、川久保様より学生一人一人にあたたかい励ましのお言葉をいただき、学生からは感謝の言葉と研究活動に励んでいく誓いを申しあげました。

ひとつこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!ご無沙汰している同級生に、恩師に・・・ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

- 研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
- ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
- 新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
- などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は6月号です)

- 1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 E-mail:igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp
名古屋市立大学医学部広報誌「一言メッセージ」係宛

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌：瑞 医 (ずいい)

発行：名古屋市立大学大学院医学研究科・医学部
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1
TEL (052) 853-8077 FAX (052) 842-0863

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp>

※次号の発行は平成21年6月下旬発行予定です。[年3回 2月・6月・10月]

☐☐
我こそは
通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、igakujimu@sec.nagoya-cu.ac.jp または医学部事務室 広報担当まで